

【試し読み版】



八坂書房

5

[第 I 卷第 8 章]

# 8

---

ジンプリチウスの優れた頭脳が、  
その高邁なる答弁より顕現する次第

隠者「おまえは何という名前なのだ」

ジンプリチウス「おれは〈ぼうず〉だよ」

隠者「おまえが女の子でないことくらい、見ればわかるさ。だから父上や母上は、おまえを何と呼んでおいでだったんだい」

ジンプリチウス「おれは〈チチウエ〉とか〈ハハウエ〉とかいうものに会ったことはないね」

隠者「それならおまえの衣服は、いつたいだれが着させてくれたんだ」

ジンプリチウス「そりゃ、〈カカさま〉さ」

隠者「ではその〈カカさま〉は、おまえを何と呼んでおられたんだい」

ジンプリチウス「おれは〈ぼうず〉と呼ばれてたね。いや、時によっちゃあ〈悪たれ小僧〉とか〈役立たずの間抜け野郎め〉とか、それから〈死肉漁りのカラス野郎めが！〉とか」

隠者「それではだな、おまえの母上のご主人は誰なんだい」

ジンプリチウス「そんなものは見たことがないよ」

隠者「じゃあ〈カカさま〉は、夜に誰と一緒に寝ていたんだね」

ジンプリチウス「〈トトさま〉さ」

隠者「その〈トトさま〉は、おまえを何と呼んでおられたんだね」

ジンプリチウス「へトトさま」も、おれを「ぼうず」と呼んでたな」

隠者「では、「トトさま」の名前は何とおっしゃる」

ジンプリチウス「へトトさま」は「トトさま」さ」

隠者「だが「カカさま」は、「トトさま」どのにむかって何と呼んでおられたんだい」

ジンプリチウス「へトトさま」だよ。いや、「旦那さま」とも言ってたか」

隠者「それよりほかの呼び方はしておいでではなかったのだね」

ジンプリチウス「ああ、いや、してた」

隠者「では何と」

ジンプリチウス「げっぶのオツサン、とか、荒くれの下衆野郎、とか、デブの豚男め、とか、まだほかにもいろいろ。口げんかになるとね」

隠者「まったくおまえは、何も知らない頓馬なのだな。

ふた親の名前も、自分自身の名前も知らんとは」

ジンプリチウス「何言ってるんだい、あんただって知らねえから、今おれに聞いてきたんだろ」

隠者「おまえは、お祈りはできるかね」

ジンプリチウス「できねえ。寢床の仕度なら、うちの女中のアンとへカカさま」がやってたよ」

隠者「わたしが聞いているのは、そのことじゃない。へ主の祈り」を諳んじることではできるか、と聞いてるんだ」

ジンプリチウス「ああ、それならできるよ」

隠者「おお、そうか、そうか。では唱えてみてくれ」

ジンプリチウス「われらが愛するへチチウエ」よ。なん

じは天です。名前をあがめさせたまえ。来たまえ王国。

御心みこころなりて、天は地へト向カハン。罪をおかす者を、

我らに与えるごとく、我らに罪を与えたまえ。我らを

悪いところにあわせないで、どうか御国みくにより、我ら

を救い出したまえ。そしてちからと栄え。限りなく。

ア、<sup>(1)</sup>マ

隠者「——おまえは、教会キルヒエというものに行ったことはな

いのかね」

ジンプリチウス「ああ、そこなら立派に登れるさ。サクキル

ランボを、その木の上から、たつぷりと上着の懐に入れて取ってきたぜ」

隠者「キルシエじゃない、キルヒエのことを言っておるのだ」

ジンプリチウス「ああ、なるほど、クリーヒエのことかい。あれだろ、あのちっちゃいスモモのこと。そうだね」

隠者「ああ神よ、どうかわれらをみそなわしたまえ。おまえはわれらが主なる神について、ほんとうに何ひとつ知らないのか」

ジンプリチウス「ああ、いや、そいつなら、うちの家の居間のドアのところにあいたよ。家の祭壇の上さ。へか

カさまが歳の市いちでそいつの絵を買ってきたんで、そこに貼りつけてあったのさ<sup>(2)</sup>

隠者「ああ、心やさしき神よ、今ようやくにしてわたしは知りました。あなたが、あなたの存在を知らしめた人間にとって、その認識は、いかに大きな恵みであり慈しみであるかということ。そしてあなたの存在を知らされぬ人間は、いかに無にひとしいものであるかということ。ああ、主よ、あなたの聖なる御名をわたしに深く尊ぶようにしてください。それによってわたしが、この崇高なる恵みを、たゆまず感謝するにふさわしい者となるように。恵みを授けてくださったあなたの惜しみない大きさに、わたしもお応えできるよ

うに。さあ、おい、ジンプリチウスよ——だっておまえは、これよりほかに名づけようがないからな、だからこの名前でいくけれども——、おまえが〈主の祈り〉を唱えるときにはだね、こう言わなくちゃいけないんだ。いいかね——。天にまします我らの父よ、ねがわくは御名をあげさせたまえ。御国を来らせたまえ。御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ。我らの日用の糧かてを、今日も与えたまえ。そして——」

ジンプリチウス「そしてチーズもよろしく、だろ」

隠者「ああ、おまえときたら。いいかね、大切なことを教えるから、少しのあいだ口を閉ざしていなさい。このことはね、おまえにとってチーズよりもずっと必要

なものなのだよ。へカカさま」どのが仰せられたように、おまえはちよつと、間の抜けたところがあるのかもしれない。おまえのような若い子どもが、年をとった大人の話をさえぎり、割って入るのはふさわしいことではない。それはやめて口を閉ざし、耳を傾けて学ぶことだ。やれやれ、おまえのご両親がたの住まいがどこなのか、わかりさえすればな、そこまでわたしが連れて帰ってやるのだが。そしてついでに、子どもの育て方についても、ご両親がたに伝授してさしあげようものを」

ジンプリチウス「おれはこの先、どこへ行ったらいいのか、わからないんだ——。うちの家は焼かれちまった

からね。へカカさまは走って逃げて、それからまたウルゼレと一緒に戻ってきた。それからへトトさまも。うちの女中は病気になったみたいで、家畜小屋で寝ていたよ」

隠者「おまえの家は、誰に焼かれたんだね」

ジンプリチウス「鉄の男たちがやってきたんだ、まったく。そいつらは牡牛みたいにでっかい、変な乗り物に座っていて、だけど牛の角はないんだ。そしてそいつらが、うちの羊や牝牛、豚たちを刺し殺してしまった。それでおれは走って逃げただけど、家が焼かれちゃったのはその後のことさ」

隠者「おまえのへトトさま」どのはそのあいだ、どこに

いたんだね」

ジンプリチウス「鉄の男たちに縛られていたんだ、ちくしょう。それでうちの年寄りのヤギに〈トトさま〉の足の裏をなめさせたもんだから、それはもうげらげらと大笑いしてたよ。そういうわけで、例の鉄の兵隊たちに銀貨をたくさんプレゼントしてた。大きいのも小さいのも、きれいな黄色のも。それから、ものすごくきらきら光る立派なやつも。白い数珠玉がいっぱいつながった、きれいな紐の輪もたくさん」

隠者「それはいつのことだったんだい」

ジンプリチウス「ちえっ、おれが羊たちの番をしなくちゃいけないかった時さ、まったたく。それで連中は、おれ

のバグパイプまで取っ払いこうとしやがった」

隠者「おまえが羊の番をしたのはいつだね」

ジンプリチウス「ちえっ、聞いてなかったのかい、鉄の男たちが来た時さ。その後でうちのアンに、おまえは早く逃げろって言われて。さもないとへイタイ〜どもに連れて行かれちまうよってさ。鉄の男たちのことを、アンは言ってたんだらう。それでおれは一目散に走って、それからここに来た」

隠者「おまえは、今からどこに行こうと考えておるのだい」

ジンプリチウス「どうしたらいいか、正直わからない。でもここに、あんたのところに行きたい」

隠者「おまえをここで引き受けるのは、わたしのためにも、おまえのためにもならない。まあいい。まずは食べなさい。それが済んだら、人びととところに連れて行ってやろう」

ジンプリチウス「ちえっ、それじゃあ早く教えてくれよ、そのへヒトビト」ってというのは何のことだい」

隠者「人びとというのはだな、わたしやおまえのような人間のことだよ。へトトさま」やへカカさま」、それからおまえの家のアンは、みんな人間だ。そして人間がたくさん寄り集まっているのを、人びとと呼ぶんだ」  
ジンプリチウス「へえ、なるほど」

隠者「さあ、では食べなさい」

わたしたちの問答はこのとおりであった。そのあいだ隠者は、とても深いため息を何度もつきながら、わたしの顔をじっと見つめていた。それは隠者が、わたしの単純さと無知にたいして、大きな同情の念を禁じえなかつたからなのか、それともわたしが、この後に何年も経ってから知ることにある、とある事情によるものだったのか、それは今のわたしにもわからない。

〔訳註〕

(1) キリスト教徒の最も重要な祈りのことばである「主の祈り」の自由奔放な変形。日本語の正しい章句の全文は以下のとおり。「天にましま

す我らの父よ／ねがわくは 御名みなをあがめさせたまえ／御国みくにを 来らせ  
たまえ／御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ／我らの日用にちようの糧かて  
を 今日も与えたまえ／我らに罪をおかす者を 我らがゆるすごとく／  
我らの罪をもゆるしたまえ／我らを ころみにあわせず 悪より救い  
いだしたまえ／国とちからと栄えとは 限りなく なんじのものなれば  
なり／アーメン」(『新聖歌』、教文館、二〇〇三年)

(2) 当時の大衆向けメディアとして、一枚刷りのビラや信心用の聖画像  
が市場で売られていたことがわかる。

(3) 「同情」の原語 *Mitleiden* は文脈によって「共感」「共苦」とも訳し  
うる多義的な語。キリスト教の重要な伝統である主体的な信仰としての  
〈キリストのまねび〉(imitatio Christi) の核心的な徳。

[著者紹介]

ハンス・ヤーコプ・クリストツフェル・フォン・  
グリンメルスハウゼン

Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen (1622頃-1676)

ドイツ・バロック文学を代表する小説家・著述家・暦作者。ドイツ中西部ヘッセン地方の古都ゲルンハウゼンに生まれ、パン職人だった祖父のもとで育つ。三十年戦争に従軍して各地を転戦したあと、ドイツ南西部の上部ライン地方に居を定め、貴族の所領における執事、酒場の主人、町の代官としての職務をこなす生活のなかで、晩年の十年足らずのあいだに数多くの著作を執筆する。支配階層と民衆層の中間領域を生活圏として社会の緊張関係をつぶさに観察しながら、近世ヨーロッパに成立するピカロ（悪漢）小説と阿呆文学の傑作群を残したが、変名のもとに書かれた代表作『ジンプリチシムス』の著者であることが世に明らかとなったのは、ようやく19世紀中葉のことだった。当代の大ベストセラーはやがて「ジンプリチシムスもの」と呼ばれる類似作品のブームを没後においても発生させる。時代の硬軟さまざまな言説に取材しつつ、それと戯れるように形成された生氣あふれる言語表現は、後のグリム兄弟によるドイツ学の営みにとっても貴重な資料となった。

[訳者紹介]

吉田 孝夫 (よしだ・たかお)

1968年鳥取県生まれ。

奈良女子大学文学部教授。

京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了（ドイツ語学ドイツ文学専修）。博士（文学）。

著書に、『山と妖怪 ドイツ山岳伝説考』（八坂書房）、『語りべのドイツ児童文学 O・プロイスラーを読む』（かもがわ出版）、訳書に、プロイスラー『わたしの山の精霊ものがたり』、『かかしのトーマス』、『ニット帽の天使』（さ・え・ら書房）、ラーニシュ『図説 北欧神話の世界』、ホイスラー『図説 ゲルマン英雄伝説』、ザルトーリ『鐘の本』、グリム兄弟『ドイツ伝説集』（八坂書房）などがある。

ジンプリチシムス——原典訳『阿呆物語』

【試し読み版】その⑤

グリーンメルスハウゼン作

吉田孝夫訳

二〇二六年三月二十五日 発行

発行所 (株) 八坂書房

千代田区神田猿樂町一—四—十一

©2026 YOSHIDA TAKAO 無断複製・転載を禁ず

本ファイルは試読用に判型を変え再編集したものです。  
総目次、ならびにその他詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.yasakashobo.co.jp/books/detail.php?recordID=787>